

# 1940年代上海における探偵小説について

池 田 智 恵

## Detective Story in 1940's in Shanghai

IKEDA Tomoe

It has been previously noted that in Shanghai in the 1940s the magazine *Wanxiang* was active in publishing detective fiction, and that several magazines devoted to detective stories were published in the immediate postwar period, but there has been no detailed research on this subject. This paper provides an overview of detective fiction in the 1940s, with an analysis of its readership and reception. *Wanxiang* was a magazine popular in Shanghai during the last days of its so-called “solitary island” period (when the autonomous foreign concessions were besieged by Japanese forces), publishing translations of stories by Ellery Queen and other foreign writers along with original works by Chinese. The editors were attentive to both the entertainment and educational value of the detective genre, and aimed at providing “spiritual sustenance” (*jingshen shiliang*) to an increasingly culturally deprived Shanghai. Between the end of the war and 1949 four magazines of detective fiction were founded and eventually ceased publication — *Dazhentan*, *Shinzhentan*, *Lanpishu*, and *Hongpishu* — which also praised the detective story as “spiritual sustenance” for young readers. They ran a large volume of translated material by the Western stars of the genre such as Ellery Queen, John Dickson Carr, and Agatha Christie, as well as lesser-known crime fiction probably sourced from Western pulp magazines. Original work included a non-fiction serial that had the full cooperation of the Shanghai Municipal Police Department and was immensely popular. Initially translations of foreign writers dominated, but gradually the number of original works of detective fiction in Chinese grew in number, and budding young writers emerged. All of this was precious entertainment for the readers. Letters to the editors of the magazines welcome the detective stories as “spiritual sustenance,” indicating that readers were also aware of the possibilities of the genre to instruct as well as entertain.

## はじめに

探偵小説は、一般に1840年代にエドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe 1809-1849）に発明され、後にイギリス、フランスや日本等各国に波及し、近代を代表する娯楽小説の一大ジャンルとなったとされる。中国では、清末に翻訳小説ブームを迎えた。その後、1920年代に創作ブームを迎えたとされる。この時期には、初の探偵小説専門雑誌『偵探世界』（1923-1924）、程小青による「東方ホームズ」霍桑や、孫了紅による「東方アルセーヌ・ルパン」魯平等の当時を代表する探偵や怪盗のキャラクターが生み出された。こうした清末の翻訳ブームや、20年代の創作ブームは、先行研究によってある程度明らかにされ、前述の程小青に関しては、専論も存在し、探偵小説研究の中心はこの時期と考えてよい<sup>1)</sup>。一方、1940年代の探偵小説に関しては、ほぼ論考が存在しない。40年代には、探偵小説専門雑誌として『新偵探』『大偵探』『藍皮書』『紅皮書』の4誌の存在が確認されており、専門雑誌の数だけを言うのであれば、20年代を凌駕している。先行研究もこれらの存在に言及しているが、雑誌の簡易な紹介にとどまっている。近代探偵小説は40年代に収束していくが、40年代にこれだけの雑誌が創刊されたのであれば、その収束について考えるためにも、如何なるものであったか把握する必要があるだろう。本稿では、40年代の探偵小説に注目し、そのメディアと読者について如何なる状況が発生したのかを考えたい。

### I 「孤島」上海における探偵小説の復権

40年代における探偵小説について考えていくが、その前段階として、1930年代について確認するところから始めよう。前述したように、探偵小説研究の中心は20年代であり、30年代以降にはあまり記述がない。40年代に注目するにあたっては、30年代について簡単に触れておく必要があるだろう。

1) 清末の翻訳探偵小説に関しては、代表的なものとして樽本照雄の『漢訳ホームズ論集』（汲古書院、2006年）等の論考がある。また近代探偵小説に関しては、代表的なものとして范伯群による『中国近現代通俗文学史』（江蘇教育出版社、1999年）や『中国現代通俗文学史』（北京大学出版社、2007年）、湯哲声『中国現代通俗小説思辨録』（北京大学出版社、2008年）に探偵小説を扱った項目があるが、いずれも中心は20年代についてと言って良い。程小青の専論としては、姜維楓『近現代偵探小説家程小青研究』（中国社会科学出版社、2007年）がある。国内の研究としては、阿部泰記「中国近代における探偵小説の創作」（『樋口進先生古稀記念 中国現代文学論集』中国書店、1990年）がある。

## 1. 探偵小説の苦境 — 1930年代

探偵小説という新しい小説ジャンルの創作は、中国人作家にとって難題であったようだ。20年代に探偵小説を積極的に掲載した雑誌『紫羅蘭』や『半月』、中国初の探偵小説専門誌『偵探世界』に、時に穴埋めのように掲載される読者が寄せた雑評からは、読者が外国産の翻訳探偵小説と国産探偵小説との間にギャップを感じていたこと、さらに当時の作家の書いた記事から創作に苦心していた様子が見て取れる。探偵小説の創作は、当時かなり本土化した作品も創作されたが、創作される探偵小説の質と量、さらに読者とのバランスがとれていなかった<sup>2)</sup>

それが、30年代初頭になると、顕著になっていく。通俗小説雑誌『紅玫瑰』の編集者のコラムには、「現在、我々は、より多くの武俠小説と探偵小説を掲載したいと考えているが、しかし、よい原稿が見つからない。実を言えば、これらのジャンルを書く専門家が少なすぎるのだ!<sup>3)</sup>」や「何の特集号を出すかについて、投票を集めた結果、恋愛小説特集と探偵小説特集が最も多く票を占めた。(略)探偵小説特集号については、作家が少ないのでさらに困惑している<sup>4)</sup>」といった悩みが綴られている。よい作家または作品を見つけるのが困難であったようだ。

1930年代の代表的な通俗小説雑誌『珊瑚』(1932-1934)を見ると、探偵小説としては、程小青の創作「八十四」や『紅玫瑰』から出た新人作家の柳村任の「南方雁」等が連載され、探偵小説が毎号一本は掲載されていると言ってよい。だが、作家は、ほぼ上記の二人のみで、他の作家の作品は、短編に限っても全期を通じて5作品に満たず、1920年代の雑誌と比べて創作が衰退していることは、一目瞭然である。

1946年から1947年まで発行された、程小青主編の雑誌『新偵探』の程小青による「論偵探小説(探偵小説を論じる)」に、それまでの探偵小説を振り返った次のような記載がある。

我が国の創作探偵小説は、民国の数年間、ささやかながら輝かしい一頁があった。拙著の霍桑探案以外に、兪天憤の中国新探案、陸澹盦の李飛探案、張碧梧の宋悟奇探案、趙苕狂の胡閑探案、朱玦の楊芷芳探案に、柳村任の梁培雲探案等があり、その他に孫紅の東方俠盜魯平らがあった。(略)残念なことにこれらの作家の多くは「興に乗じて、興を尽く

2) 20年代の探偵小説雑誌における読者投稿については、拙著「1920年代における探偵小説創作の黎明——近代中国と日本の「雑誌空間」を通じて」(『東アジア文化交渉研究』第4号、2011年3月)を参照。

3) 原文：現在我們很希望多刊載一些武俠和偵探小説，但找不到較好的稿子！委實寫這二項小説的專家太少了！（趙苕狂「花前少語」『紅玫瑰』第6卷第10期 1930年月未記載）

4) 原文：關於發行甚麼專號，投票公決的結果：以主張出愛情專號和偵探專號者為最佔多數。(略)！至於偵探專號作家既少，更加倍地感到一種困惑！（趙苕狂「花前少語」『紅玫瑰』第7卷第9期 1931年月未記載）

すのみ」で、彼らの努力はほどなく違う方向へと向かい、最後まで探偵小説に取り組むことなどできなかった<sup>5)</sup>。

作家や作品からみて、20年代から30年代前半について述べたものと思われる。この回想からも、20年代には作家も増えたが、その後創作を続けた作家は多くなく、30年代になると不作の時代となっていったことが読み取れる。無論、1930年代に全く探偵小説が書かれなかったわけではない。雑誌以外の当時出版された書籍等の調査も必要だが、少なくとも、30年代は20年代を上回る探偵小説の創作量はなかったと考えてよいだろう。

## 2. 翻訳探偵小説ブームの再燃——40年代前半

所謂「孤島」末期の上海で、再び数多くの探偵小説が雑誌に出現し、注目されるようになる。その筆頭としてあげるべきは1941年7月に創刊された『万象』(1941-1945)だろう。阪口直樹は『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』で、次のように述べる。

なかでも注目したいのは、「偵探小説」への関与の深さである。翻訳小説では、「ギリシヤ棺の謎」(エラリー・クイーン、程小青・嘯龍訳「希蠟棺材」創刊号～第三年一期)、「ピロドの爪」(アール・スタンリー・ガードナー、林俊千訳「美人掌」創刊号～第一年五期)などが訳載されているほか、中国人作家でも孫了紅「俠盜魯平奇案」(創刊号～第二年九期)、孫了紅「詩人警察」(第二年一〇期)、李信之「福爾摩斯話匣」(第二年五期～第二年一〇期)、楊真如「凡士探案的探案」(第二年六期)などが大量に掲載されているのである<sup>6)</sup>。

申東順によれば、『万象』が出版されたのは、「上海文化が例を見ない不振に陥り、出版界が沈黙した時期<sup>7)</sup>」である。上海の読者たちに、一つには教育的な意味での、またもう一つには上

5) 原文：說道我國創作的偵探小說，在民國七八年間，也會有過一小頁燦爛的記載，除了拙著霍桑探案以外，有俞天憤的中國新探案，陸澹齋的李飛探案，張碧梧的宋悟奇探案，趙茗狂的胡間探案，朱戩的楊芷芳探案，柳村任的梁培雲探案，其他反偵探的還有孫了紅的東方俠盜魯平，(略)可惜這許多作家都是「乘興而作盡興而已」，他們的努力不久便都變換了別的方向，不能始終其事。(程小青「論偵探小說」『新偵探』第1期 1946年1月)

6) 阪口直樹『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』、東方書店、2004年、176-177頁

7) 原文：上海文化空前蕭條，出版界空前沉寂的时期。(申東順『在說与不說之前 上海 淪陷期雜誌「万象」研究』、中国伝媒大学出版社、2012年、47頁)

海市民の抑圧された日常生活を吐露する場としての「精神的な糧（原文：精神食糧）」を提供したと言う<sup>8)</sup>。しかも「当時一般の雑誌が4千冊以上売れることは少なかったが、『万象』は毎号1万冊を越えており、第1年第11期の発行数はすでに2万5千冊に達していた。毎号の発行量は平均して2万冊であり、上海の街角ではいつでも人々が手にして読んでいるのを見ることが出来、当時の雑誌の中では稀に見る現象であった<sup>9)</sup>」。と指摘されており、かなり売れ行きのよい、一定の影響を持った雑誌だったと考えられる。探偵小説が、この雑誌に数多く掲載されていたということは、それが多くの読者に受容されたということの意味しているだろう。

上海で出版された他の小説雑誌における探偵小説の扱いはどうだったのだろうか。40年代前半の主要通俗小説雑誌『小説月報』（後期）（1940年10月－1944年11月 主編：顧冷観）、『大衆』（1942年11月－1945年8月 主編：銭須弥）、『春秋』（1943年－1949年 主編：陳蝶衣）について考えてみたい。

『小説月報』（後期）に掲載された探偵小説は翻訳のみ、『大衆』、『春秋』には翻訳及び創作が掲載されている。これを見る限り、当時の探偵小説は、創作よりも翻訳の方が圧倒的に多かったことが分かる<sup>10)</sup>。創作小説に関しては、主な作者は20年代から創作している程小青と孫了紅の

8) 注7 前掲書 48-49頁

9) 原文：当時一般杂志很少能够销达四千册以上，但它一直超过一万册，第一年第一期发行量已经达到两万五千册。它每期发行量平均达两万册，在上海街头随时能看到人们手上拿着它在看，这在当时杂志发行中是一个罕见的现象。（注7 前掲書 61-62頁）

10) 以下『小説月報（後）』、『大衆』、『春秋』に掲載された全探偵小説作品。表記は、翻訳作品は、（作品名（原題 ※明記してある場合に限る、筆者が調査したものに關しては筆者注を〔 〕で示す）原作者（英語表記 ※明記してある場合に限る、筆者が調査したものに關しては筆者注を〔 〕で示す）訳者 掲載号（掲載期間）、創作作品は（作品名 原作者 掲載号（掲載期間））に依って記載する。括弧以外の表記は掲載雑誌による。『小説月報（後）』（翻訳）「陳查禮探案鸚鵡聲」（Chinese Parrot）畢格斯〔Earl Derr Biggers〕、程小青 1-23（1940.10.1-1942.11.25）、「一幅畫」〔The Greuze か〕 Freeman Wills Crofts 方悦 8（1941.5.1）、「斐洛凡士賭窟奇案」（筆者注：THE CASINO MURDER CASE か） SS Van Dine 程小青 24-39（1942.9.1-1943.11.15）、「聖徒奇案 怪旅館」 紀德烈斯〔Leslie Charteris〕 程小青 40-43（1944.4.15-7.15）『大衆』（翻訳）「凡士探案咖啡館」 SS Van Dine 程小青 創刊号－1943年8月号（1942.11.1-1943.8.1）、「鳥羽之屋」Edogar Wallece 孫了紅 1944年1月号（1944.1.1）、「聖徒奇案王冕的變幻」 紀德烈斯 程小青 1943年9月号－10月号（1943.9.1-10.1）、〔以下全て紀德烈斯（Leslie Charteris）作 程小青訳「聖徒奇案」シリーズ〕「摩登奴隸」1943年11月号－12月号（1943.11.1-12.1）、「離兄離弟」1944年1月号（1944.1.1）、「晚宴」1944年2月号（1944.2.1）、「鬚的引線」1944年9月号（1944.9.1）、「創作」「俠盜魯平案烏鴉之畫」 孫了紅 1943年8月号－11月号（1943.8.1-11.1）、「紅痣記」柳雨生 1944年1月号（1944.11.1）、「古鋼表」 程小青 1944年12月号（1944.12.1）、「黑臉鬼」 程小青 1945年1月号（1945.1.1）、「王冕珠」 程小青 1945年2月号（1945.2.1）、「窃盜」 徐卓呆 1945年3・4月号（1945.4.1）、「反抗者」 程小青 1945年5月号（1945.5.1）、「別墅之怪」 程小青 1945年6月号（1945.6.1）、「斷指餘波」 程小青 1945年6月号（1945.6.1）『春秋』（翻訳）「聖徒奇案女首領」 紀德烈

2名のみであり、しかも旺盛に創作したのは孫了紅だった。探偵小説創作を担う作家は20年代とはあまり異なっていないが、対照的に、翻訳は格段に量が増えており、S・S・ヴァン・ダイン (S. S. Van Dine 1888-1939) やF・W・クロフツ (Freeman Wills Crofts 1879-1957)、エラリー・クイーン (Ellery Queen 1905-1982) 等、探偵小説史上に残る有名作家や、「セイント」サイモン・テンプラーものを書いた、レスリー・チャータリス (Leslie Charteris 1907-1993) 等の作品が見える。20年代にはなかった多彩な探偵小説作品が、この時期に紹介されたことが指摘できる。

この時期に多様な作品が受容されるようになった理由は、色々考えられるだろう。阪口直樹は、陳蝶衣が探偵小説は歓迎したものの、武侠小説は掲載しなかったことに注目し、『万象』は「新しい通俗小説の展望を明確に意図して編集され」、「旧「通俗小説」には、封建的宗法的意識が充満しており、内容的に否定されるものとして位置づけされるなかで、「武侠小説」が否定され、新しい通俗小説の試みとして「偵探小説」を位置づけている<sup>11)</sup>と分析している。これが妥当かどうかは一概に言えないが、『春秋』『大衆』『小説月報』(後期)には、探偵小説は掲載されたが、武侠小説は掲載されていない。こうした現象は、当時の中国における探偵小説の位置づけを理解する手がかりとなろう。少なくとも、探偵小説が不作だった30年代を経て、40年代前半には、私たちが知るような欧米の主要な探偵小説が広く翻訳紹介される状況が生まれており、読者の探偵小説への理解や需要の質が20年代とは異なっていたと考えられるだろう。

## II 1940年代後半における探偵小説

終戦後、更に新たな動きとして探偵小説雑誌が創刊され始める。『現代通俗文学史』等に挙げられているのは、『新偵探』(1946年-1947年 全17期 藝文社)、『大偵探』(1946年-1949年 全36期 第一編輯公司)、『藍皮書』(1946年-1949年 全26期 環球出版社)『紅皮書』(1949年 全4期 合衆出版社)の4誌である。『新偵探』及び『藍皮書』には程小青、『大偵探』には孫了紅、『紅皮書』には程小青と孫了紅の名前が編集者や顧問の中に見えており、これらの雑誌を

---

ス [Leslie Charteris] 程小青 第1年第1期-第1年第9期 (1943.8.15-1944.8.5)、「聖徒奇案驚人的決戦」 杞德烈斯 [Leslie Charteris] 程小青 第1年第10期-第2年第6期 (1944.10.5-1945.6.1)、「恐怖之」(Pencil points to murder) 蕙爾泰 安巴伯原 [Barber, Willetta Ann & Schabelitz, R. F. か] 徐慧棠 第4年第1期 (1945.4.10) (創作)「俠盜魯平案木偶的戲劇」 孫了紅 第1年第1期-第1年第4期 (1943.8.15-11.15) [以下、全て孫了紅の俠盜魯平案]、「國魚肝油者」 第1年第5期-第1年第6期 (1944.1.15-3.15)、「劫心記」 第1年第7期-第1年第8期 (1944.4.15-6.15)、「雀語」 第2年第1期-第2年第7期 (1944.11.20-1945.8.1)

11) 注6前掲書188頁

牽引したのは、20年代に引き続き、程小青と孫了紅だったことがわかる。

### 1. 娯楽と教育を担う探偵小説

これらの雑誌は、読者に何を提供しようとしていたのか。『新偵探』と『大偵探』を例に見てみよう。『新偵探』創刊号の「引言」に発行の目的が述べられている。

探偵小説は、頭を賢くする一種のリラクゼーションの道具である。ほかでもない、娯楽、退屈しのぎだ。現在我が国はすでに艱難辛苦の建国に道を踏み出している。国民一人一人が精神を奮い立たせ、直接間接に参加しなければならない。身体を動かすばかりでなく、頭も使わなければならない。一日張りつめて仕事をし、食事を終え燈の下で読み物を取り出し、疲れた頭をちゃんとリラックスさせるのは、間違いなく必要なことだ。このささやかな雑誌が、それに貢献できることを祈っている<sup>12)</sup>。

探偵小説は娯楽だとする一方で、それと同時に頭を使い賢くするという教育性も強調されている。『大偵探』では、興味深いことに、『新偵探』「引言」の「探偵小説とは、頭脳を賢くする一種のリラクゼーションの品である」という同じ文言を繰り返した上に、探偵小説は、「形をかえた科学の教科書<sup>13)</sup>」であり、「理知を喚起することにより、好奇心や知識欲を引き起こす作用がある。(略)本雑誌は、欧米の有名な長短編探偵小説及び事実探案を紹介することにより、読者の知識欲を啓発したい<sup>14)</sup>」と述べている。この2誌の目的は同工異曲であったと指摘でき、ここに40年代の探偵小説が目指した方向が見られると言えよう。

では、こうした雑誌の出現は読者にどう受け取られていたのか。『新偵探』『大偵探』の編集者の言葉から、ある程度類推することができる。例えば、『新偵探』の「餘墨」欄に次のような文がある。

幸せなことに、読者の皆さんが我々を勇気づけてくださったのは、予測外であった。本

12) 原文：偵探小説は睿智頭腦的一種蘇散品。是的，它是一種娯樂，一種消遣。現在我們的國家已經踏上了艱難繁重的建國途徑，每一個國民都得抖擻精神直接間接地來參加，不但用手，也得用腦。在一天的緊張工作之餘，飯罷燈下，拿一本讀物，使疲乏的腦子得到一種正當的蘇散，事實上的確有需要。這一本小小的刊物很想在這方面有一些貢獻。(「引言」『新偵探』第1期、1946年1月)

13) 原文：偵探小説是化裝的科學教科書(「編輯後記」『大偵探』第1期、1946年1月)

14) 原文：它具有喚醒理智，引起好奇心與求知慾的作用。(略)本刊旨在介紹歐美著名的長短篇偵探小説及事實探案，藉以啓發讀者的求知慾。(引用元は注13に同じ)

雑誌を創刊する前は試してみようと考えていただけで、あまり公算はなかった。しかし、創刊号を発行後、10日を待たずに、初版は、完全に売れてしまった。読者からの再版の要望の手紙が次々に届いた。これは我々を十二分に奮い立たせた。現在我々は、すでに1、2、3期を再版し、皆さんのご希望にお応えしようとしている。(略)同時に、同じような雑誌も出版され、一種探偵小説が広く普及していくような雰囲気がある。これも我々にとっては意外な収穫であった<sup>15)</sup>。

つまり、人気を博していたのである。「同じような雑誌」というのはおそらく『大偵探』を指すのだろう。その『大偵探』の編集後記には「創刊号を発行後、我々は非常に大きな興奮を覚えた。少なくない小説愛好者が『大偵探』の発行を歓迎してくれたからだ<sup>16)</sup>」とある。やはり編集部の手応えは良かったようだ。読者は、どうやら娯楽の中で教養をという雑誌を歓迎していたと推測できる。

## 2. 小説とルポルタージュのあわい

では、当時の読者に受け入れられた探偵小説雑誌には如何なる作品が掲載されていたのか。『新探偵』と『大偵探』を例に見てみよう。

### (1) 翻訳作品

『新探偵』と『大偵探』の2誌に共通して指摘できるのは、40年代前半の傾向を引き継いで翻訳ものの探偵小説が紙幅を大きく占めていたことだ。さらに40年代後半に新しく見られる特徴として、翻訳ものの犯罪事件のルポルタージュ風の作品も多く掲載された。

特に創刊当時の『大偵探』は、小説及びルポルタージュ風の作品が全部で9作掲載されているが、その全てが翻訳であった。この傾向は第8期あたりまで顕著であり、それ以降でも雑誌の3分の1程度を翻訳が占めた。また『新探偵』は、雑誌の3分の1程度を常に翻訳作品が占めた。

15) 原文：幸而讀者們給予我們的鼓勵，出乎我們的預期之外。本刊在問世以前，祇抱著一種嘗試的企圖，原沒有多大把握。但是在創刊號發行後，不到旬日，初版的書完全售罄。讀者們要求再版的紛至沓來。這是我們感到十二分興奮的。現在我們已將本刊一、二、三期同時再版，以滿足向隅者的期望。(略)同時同性質的刊物也接踵而起，造成一種偵探小說趨向普遍化的氣氛，這更是我們意外的收穫。(「餘墨」『新探偵』第6期、1946年6月)

16) 原文：創刊號發行後，給了我們很大的興奮，知道已有不少的小說迷，在歡迎「大偵探」出現。(「編輯後記」『大偵探』第2期、1946年月未記載)



翻訳作品としては、かの「アクロイド殺し」や日本でも話題になった「神の灯」など有名作家の作品が掲載されていたほか、無名作家たちの作品も多い<sup>17)</sup>。ただし無名作家たちの作品は、小説カルポルタージュか判別できないものが多数あり、また、19世紀後半に出現したダイム・ノヴェルと呼ばれたアメリカの大衆向け出版物や20世紀初頭から台頭した大衆向け小説雑誌のバルブマガジンと縁の深いと思われる作品が少なくない。

例えば、『大偵探』第4期の「カーター事件簿 ジュエリー店盗難事件（原文：カ脱探案 珠寶店竊案）」は、いわゆるニック・カーターものである。ニック・カーターはダイム・ノヴェル時代から人気を博し、バルブ・マガジンに引き継がれた英雄的キャラクターで、様々な雑誌に、様々な作家によって書かれた。1933年には『ニック・カーター・マガジン (Nick Carter Magazine)』というキャラクター名をタイトルにしたバルブマガジンまで創刊された<sup>18)</sup>。また、『新偵探』第2期の「三つの吸い殻（原文：三個紙煙尾）」の作者Edwin Bairdは、H. P. ラヴクラフト (H. P. Lovecraft 1890-1937) を生み出したバルブマガジン『ウィアード・テールズ (Weird Tales)』の初代編集者ではないかと思われる。同名の人物が、ハードボイルド小説を生み出し

17) 『新偵探』及び『大偵探』に掲載された主な探偵小説は次の通り。表記は、翻訳作品は、(作品名(原題 ※明記してある場合に限る、筆者が調査したものに関しては筆者注を〔 〕で示す) 原作者(英語表記 ※明記してある場合に限る、筆者が調査したものに関しては筆者注を〔 〕で示す) 訳者 掲載号(掲載期間))に倣って記載する。括弧内以外の作者名の表記は掲載雑誌による。『新偵探』:「奎寧探案 非洲旅客」〔The Adventure of the African Traveler〕愛雷奎寧〔Ellery Queen〕黑白廬 第1期(1946.1.15)、「畫中線索」〔Murder enters the picture か〕R. F. Schabelitz Willetta Ann Barber 劍虹 第1期-第15期(1946.1.15-1947.1.1)、「三層樓公寓」〔The Third Floor Flat か〕亞茄莎 葛麗斯丹〔Agatha Christie〕邵殿生 第5期(1946.6.1)、「三個跛子」〔The Adventure of the Three Lame Men〕奎寧〔Ellery Queen〕程小青 第7期-第8期(1946.7.1-7.16)、「眼睛一霎」Agatha Christie 雍彦 第9期(1946.8.1)、「聖徒奇案一個愛好玩具的人」紀德烈斯〔Leslie Charteris〕程小青 第9期-第10期(1946.8.1-8.16)、「四種可能性」Agatha Christie 殷鑑 第12期(1946.9.16)、「聖徒奇案藝術攝影師」紀德烈斯〔Leslie Charteris〕程小青 第11期-第12期(1946.9.1-10.1)、「奎寧探案覓寶藏」愛雷奎寧〔Ellery Queen〕程小青 第13期-第14期(1946.10.16-11.1)、「黃色的澤蘭花」〔Yellow Iris か〕Agatha Christie 殷鑑 第14期(1946.11.1)、「大施主」紀德烈斯〔Leslie Charteris〕程小青 第15期-第16期(1947.1.1-2.1)、「遺傳病」Agatha Christie 汪經武 第16期(1947.2.1)、「包羅德探案古劍記」葛麗斯丹〔Agatha Christie〕紫竹 16-17 1947.2.1-6.1)、「夢」〔The Dream か〕Agatha Christie 殷鑑 第17期(1947.6.1)、『大偵探』:「奎寧探案 健身院慘劇」Ellery Queen 翠谷 第1期-第10期(1946.1.16-1947.5.15)、「機密文獻」John Dicson Corr〔Carrの間違いか。ジョン・ディクソン・カーでは〕許靖孚 第5期(1946.9.1)、「奎寧探案: 謀殺遊戲」Ellery Queen 孟頴 第17期-第18期(1948.2.1-3.1)、「雪夜飛屋記」〔クイン「The Lamp of God(邦題: 神の灯)」の翻案〕林微音 第19期-第26期(1948.4.1-10.16)、「皇苑傳奇」〔The Murder of Roger Ackroyd〕亞伽沙 克麗斯丹〔Agatha Christie〕姚蘇風 第20期-第36期(未完)(1948.5.1-1949月日未記載)

18) 荒俣宏『バルブマガジン 娯楽小説の殿堂』、平凡社、2001年、49頁

たパルプ・マガジン『ブラック・マスク (Black Mask)』に作品を書いている<sup>19)</sup>。さらに『大偵探』第1、2期の「第五の鍵 (原文：第五隻鑰匙)」の作者は、ジョージ・ハーマン・コックス (George Harmon Coxe 1901-1984) で、探偵の名前からケント・マードックものだと思われる。ジョージ・ハーマン・コックスはパルプマガジンを中心に活躍した作家で、『ブラック・マスク』にも多数の作品が掲載されている<sup>20)</sup>。『新偵探』『大偵探』に掲載された作品の原作が、パルプマガジンの掲載作と特定出来たわけではないが、2誌に掲載された翻訳作品がパルプマガジンを淵源にしている可能性は十分に考えられる。

小説の翻訳の他、毎号少なからず掲載されたのは、内容や描き方から実際に発生した事件についてのルポルタージュとおぼしき作品の翻訳である。

例えば、『大偵探』第1期の「じゃがいも袋の中の死体 (原文：馬鈴薯袋裏的屍体)」(Barton Black 原著 呉鏡法訳) は、アメリカで発生した殺人事件であるが、ある農夫が死体を発見するところから始まり、救急車や警察が来る描写が続く。その際に「なかには、キング警部と捜査員ヴァウンが座っており (原文：裡面坐著金探長 (Harola [原文ママ] R. King) 和探員伏恩 (William Vaughn))」等のように、もとの人物の名前の表記が付け加えられている。さらに地名も同じように原文が並記される。そして警察がいかに捜査し、尋問を行い、被疑者を絞り込み、真相に近づいていくかを事細かに書いており、犯人逮捕、裁判の経過、判決までが、細かな日時とともに記載される読み物となっている。紙面には、当時実際に使われたと思しき写真等も掲載された。これがルポルタージュとおぼしき作品のパターンと言ってよい。ただし、これらが本当にルポルタージュなのか否かははっきりとしない。写真にはもっともらしい説明が付記されるが、写真も記事にも実際に何に掲載されたかは明記されない。これらの淵源を探るのは難しいが、ひとつの可能性として、『大偵探』第16期の「話をできる死人 (原文：会講話的死人)」は「美国事实探案」とあり、ルポルタージュ作品である可能性が強い。原載は一般には記載されないが、これに限っては、「原載 Startling Detective 雑誌」とある。この雑誌はおそらくパルプ・マガジンの『Startling Detective Adventure』でないかと考えられる。

## (2) オリジナル作品

創刊当初は、翻訳ものが大多数を占めていた2誌だが、中国人作家のオリジナル作品も次第

19) 『ウィアード・テールズ』に関しては注18前掲書178頁を参照。『ブラック・マスク』については、『A Comprehensive Index to Black Mask, 1920-1951』(E. R. Hagemann, Bowling Green State University Popular Press, 1982) 37頁にEdwin Bairdによる3作品が記録されている。

20) 注19前掲書 66頁から68頁に27作品が記載されている。

に増えていく。国産の作品でも、ある程度小説作品数を確保できるようになるまで、紙面で幅を利かせていたのは、やはり、ルポルタージュ作品であった。特に『大偵探』ではそうだった。そこで、まず、ルポルタージュ作品について整理し、それから小説作品に言及したい。

『大偵探』は、第2期より断続して「事実探案」、すなわち実際に発生した事件のルポルタージュを掲載した<sup>21)</sup>。これらは、「警察局が我々と協力をしたいということにより、以後、少なからず貴重な捜査状況を『大偵探』のみに発表することになった<sup>22)</sup>」とあるように、警察の全面的な協力のもと執筆され、紙面には犯行現場、証拠、逮捕者や死体等の生々しい写真も時に掲載された。例えば『大偵探』第32期の「北駅の箱詰め死体事件の秘密（原文：北站箱屍奇案秘密）」は記事の冒頭に、革製のトランクに詰め込まれた死体の写真が掲載されている。これらの作品は、読み物としてもなかなか面白い。ルポルタージュで強調されているのは、「上海、この不思議な都市は犯罪の掃き溜めであり、冒険家の楽園である。昼、夜かまわず、大小さまざまな事件が発生する。殺人、強盗、スリ、惨殺事件、一刻も留まらずに変化し続ける<sup>23)</sup>」といった描写から分かるように、ルポルタージュで強調されているのは、治安の悪い上海で、警察が如何に証拠に基づき推理を進めるか等の科学捜査の側面である。例えば、前述の箱詰め死体事件では、捜査官が死体を見て次のように分析する。「この死体から考えると、被害者は生前頑健で、しかも逞しい人物だったろう。こういう人物を殺すのは、一人や二人でできるようなことではない。しかも死体が滑らかに切断されていること、きれいに洗われていることから、非常に綿密に練られた計画的な殺人だと言えるだろう<sup>24)</sup>」。死体の現状（物証）に基づいて論理的に推理をしている。さらに、検屍の場面では、「検屍が始まろうとしたその時、部屋はしんと静まりかえ

21) 掲載は以下の通り。表記は、期（発行年月日） タイトル 作者に倣って記載する。2（1946.5.15）「昇平街大破盜窟記」余茜蒂、14（1947.10.15）「卻利、馬萊兩個外國人怎樣害死余盛孝的？青滬公路金條命案内幕」莊元猷、24（1948.9.16）「陳元盛、姜吉祥、王海良：怎樣逃出上海監獄」吳伯錄、25（1948.10.1）「少將殺妻：上海市警察局刑事案件實錄」吳伯錄、26（1948.10.16）「蘇北十七代怨仇虹口麥田間活殺」吳伯錄、27（1948.12.1）「台灣徐州朝鮮 三幫集團大販毒」吳伯錄、28（1948.12.25）「五盜臨門」吳伯錄、29（1949.1.20）「血濺宋公園」吳伯錄、31（1949.3.1）「真如一命案偽保長吃三槍」吳伯錄、32（1949.3.16）「北站箱屍奇案秘密」吳伯錄

22) 原文：由於警局願與我們經常合作，以後，將有不少寶貴的偵探事實，可在「大偵探」中單獨發表。（編輯後記）『大偵探』第2期、1946年5月）

23) 原文：上海這光怪離奇的都市，它是犯罪的淵藪，冒險家的樂園，不論是白天或黑夜，總有着大小案件發生着，謀殺，搶劫，偷竊，兇殺……一刻不停的演變着。（吳伯錄「北站箱屍奇案秘密」『大偵探』第32期、1949年3月）

24) 原文：照這個屍體看，他生前一定身強力壯，而且很魁梧的人物，要殺死這樣一個人，絕不是一兩個人能夠成事的；而且屍體切得這樣光滑，洗得那樣乾淨，這可以說是一個有非常嚴密計劃的謀殺案。引用元は注23に同じ

り、検屍医はマスクをし、死体をひっくり返しては調べ、最後に、頭部左目の所に刺傷があるほか、踝の部分に縛られた痕があることが分かった。検屍医は傷と痕を記録し、さらに死体に付着していた証拠等を観察し、箱詰め死体は、軍人だと判明した<sup>25)</sup>」というように如何に検屍を科学的に行ったかの過程が描かれている。ほかにも推理の過程が明らかにされる点等、探偵小説に比する内容と考えるとよい。このシリーズが『大偵探』に繰り返し登場したことを考えると、少なくとも人気があったということが推測されよう。

これらルポルタージュ風作品からは、かなり明確に読者への治安意識を高める狙いが読み取れる。しかも先に述べたように、警察と協力の上で書かれたものだった。当時は、警察機構が整備され始め、捜査方法が近代化しつつあった時期でもある。これは裏返せば、こうした作品が、上海の当時の状況に基づいたものであり、読者は作品・雑誌を通じて、リアリティを感じ彼らの世界を追体験できるものとなっていたことを物語っているだろう。

次に、中国人作家による小説作品について見てみよう。両誌ともに投稿原稿を募る等、探偵小説の振興と作家の発掘に力を入れていた。『大偵探』では創刊一周年を記念して小説コンテストも行われた。第11期に原稿募集の知らせが掲載された後、第1席から第3席の入選作品が第12期から第14期まで掲載される迅速さだった<sup>26)</sup>。こうした活動が功を奏したのだろう。投稿やコンテストから出現したと思われる若手作家、少なくとも20年代までの探偵小説には見えなかった作家名が、この時期に複数出現した。『新偵探』に「章彬探案」ものを書いた曾孝先、『大偵探』に「葉黃夫婦探案」ものを書いた長川、単発ものが多い劉中和等がそうである。作品は中国に取材したものが多く、林徽音<sup>27)</sup>は海外を舞台にした「荒村夜雨荆棘尖」等を書いた。

1940年代後半の探偵小説雑誌に掲載された作品は、国産であっても、翻訳ものと同じようにルポルタージュ風の作品が多数見られ、創作については、作家の発掘が行われ、新たな作家が登場したことが明らかになった。

25) 原文：開始驗屍的刹那，全室靜寂，鴉雀無聲，法醫戴上了口罩，把屍體翻動檢驗著看，最後除發覺頭顱左眼有刀痕外，足踝部尚有繩子捆綁痕跡，法醫把驗明的傷痕記錄下來；再根據附著屍體的證物等觀察，確定箱死者是一個軍人。引用元は注23に同じ

26) 入選作品と掲載号は次の通り。第1席：「蜘蛛精」楊恨吾『大偵探』第12期（1947.8.15）、第2席：「杭州無頭大血案頭大血案」沈毅『大偵探』第13-14期（1947.9.15-10.15）、第3席：「一刻之差」封其倫『大偵探』第12期（1947.8.15）

27) 1930年代に海派作家として知られ、『語絲』等の雑誌で活躍した林徽音であろう。代表作に「白薔薇」（1929年）がある。

### Ⅲ 読者をめぐる雑誌と読者の変化

ここまで注目して来たのは、雑誌の発信者からの問題である。ここでは、受容について考えたい。40年代に再興した探偵小説を支えた、これらの雑誌の読者は如何なる特徴があったのだろうか。

#### 1. 読者参加型雑誌へ：メディアの変化

まず、読者に注目する前に、『大偵探』『新偵探』『藍皮書』『紅皮書』がどのように読者対して如何なる姿勢をとっていたのかを見たい。これら4誌には、共通した姿勢を見いだすことができる。それは、読者が参加する欄を設け、その参加を積極的に促すことだ。

『新偵探』には「小探案」という1頁程度の欄があった。簡単な推理クイズを出し、その答えを雑誌のどこかに掲載する企画である。このような推理クイズ欄は他の雑誌にも設けられ、『大偵探』では「封面探案」「封底探案」といった欄のほか、クイズの答えを編集部に送り、正解すると雑誌を無料でもらえる「有獎測驗」という懸賞すら不定期に設けられた<sup>28)</sup>。『藍皮書』または『紅皮書』においても同様の試みが見え、『紅皮書』には、孫了紅が「赤ネクタイの小さな話(紅領帶的小故事)」という、魯平の登場する小説を書き、結末を読者に推理、投稿させる欄も設けられた。

20年代においても、読者が編集部に送った要望や感想が、雑誌に掲載されるということはあった。だが、それは編集部が雑誌の企画として行ったことではなかった。読者からの要望は、編集後記の中で紹介されたり、もしくは特に欄を設けず、誌面の穴埋めのように掲載されるばかりだった<sup>29)</sup>。40年代は、それとは明らかに異なり、編集部が読者の参加を意図、企画し、雑誌に様々なコーナーを作っている。読者に、雑誌への参加を強く意識させる試みが広く行われていたのだ。

それに加えて、読者の探偵小説を読む力を養成するような狙いの読み物も数多く掲載されている。科学知識の啓蒙では、『新偵探』には、第1期から断続的に「科学偵探学」(羅薇)や「犯罪學講話」(柏曼里博士著 陳傳薪訳)等が連載され、警察に関する啓蒙では、『大偵探』13期に「南京警察總署:刑事實驗室内幕」等が掲載された。読者の探偵知識を増やし、より活発な参加を促す雑誌作りの一環と言ってよいだろう。

28) 例えば、『大偵探』第32期(1949.3.16)に「有獎測驗答案揭曉」として前号の答えが掲載されるとともに、投稿し商品を得た約100名の名前が記されている。

29) 20年代の探偵小説雑誌における読者投稿については、注2前掲論文を参照。

こうした読者参加型の雑誌を作るというのは、ある意味では読者の囲い込みをはかることであり、雑誌の質を上げ、更に売り上げ増を狙ったものでもあったようだ。『大偵探』等4誌の探偵小説雑誌で、読者から感想を直接掲載し編集者と交流する欄を設けたのが『紅皮書』である。この雑誌は第4期までしか現存していないが、第1期で「紅皮書読者倶楽部」への読者の参加を呼びかけた。この会には、読者は無料で参加でき、第1期に掲載された「紅皮書読者倶楽部章程」によれば、「紅皮書に読者の感想を伝え、優秀な作品を紹介することを目的とする<sup>30)</sup>」とある。この会に参加すると、読者は、編集部で雑誌の改善点等を含む意見等を投稿できるほか、雑誌で行われる推理クイズに投稿する権利を貰え、雑誌を半額で予約購読ができる特典があった。この読者倶楽部は概ね好評だったようだ。第2期の「紅皮書読者倶楽部」の欄には、「紅皮書がこんなに売れ行きが良いとは思ひもかけなかったが、読者倶楽部が読者の皆さんの大きな反響を頂いたのは、さらに予想外だった<sup>31)</sup>」とあるほか、出版の翌日に編集部の郵便箱が読者からの手紙で一杯になったというエピソードも紹介されている。雑誌に対する呼びかけに積極的に投稿する読者がいかに多かったかが分かる。

## 2. 「精神の糧」を求めて：読者の変化

それでは、このような雑誌に積極的に参加する読者から、何が読み取れるだろうか。彼らは、当時の探偵小説に何を見、何を求めていたのだろうか。まず、前述の『紅皮書』「紅皮書読者倶楽部」に注目しよう。ここには、読者からの投稿も紹介されており、当時の読者が探偵小説について、如何なる考えがあったかを垣間見ることができる。

例えば広州の読者は、「『紅皮書』の出版はとても嬉しい。中国の様々な物質的条件下において、一冊の完全な雑誌の出版は、まったく容易なことではない。(略)『藍皮書』は最近明らかに読者から歓迎されなくなっている。(当地について言えば)、内容と編集の仕方の段々悪くなっていることが、失敗の主な原因と言えるだろう。良い雑誌は低級趣味に迎合してはならないのだ<sup>32)</sup>」さらに「(『紅皮書』の)小説の素材に至っては非常によいと思うが、以後極力武侠や神

30) 原文：以連絡紅皮書讀者感情，介紹優秀作品為宗旨。(「紅皮書読者倶楽部 章程」『紅皮書』第1期、1949年月日未記載)

31) 原文：沒有想到紅皮書如此暢銷，更沒有想到讀者俱樂部會引起讀者這樣大的興趣。(「紅皮書読者倶楽部」『紅皮書』第2期、1949年月日未記載)

32) 原文：紅皮書の出版給予我莫大的喜悅，在中國種種物質條件下，一本完善雜誌的出版，的確是極不容易的，(略)藍皮書最近顯然也日漸不受讀者歡迎了(在本地而言)內容與編排的漸次退步，可以說是它失敗的主因，一本優良雜誌不能完全迎合低級趣味的。(「紅皮書読者倶楽部」『紅皮書』第2期、1949年月日未記載)

怪ものなど意識の低い低級創作を掲載せず、できれば文芸性に富んだ作品を掲載してほしい<sup>33)</sup>』と述べる。こうした読者の一部は、探偵小説を「低級な武侠や神怪」とは異なった娯楽小説だと考えていたことが分かる。

また、他の読者は、「この不安定で歪んだ社会の中で、我々青年のための雑誌、精神の糧はかわいそうなほど少ない。探偵（小説）は我々に鋭敏な頭脳をもたらす。（中略）実に放課後や、仕事の後の我々の良き友である<sup>34)</sup>」として、探偵小説が、文化的貧困に陥った当時の若者の「精神の糧」であると評価する。

これらの読者は、『紅皮書』のみを読んでいた訳ではない。読者投稿の中には、「私たちが書店や露店に『大偵探』や『藍皮書』を買いに行く時<sup>35)</sup>」や「私はまた探偵小説雑誌を見られて嬉しい。長男坊（新偵探）は不幸にも夭折し、私は今でも残念に思っているが、次男（×××）と三男（×××）は未だに健在だが、次男には失望しており、三男だけがなんとか見られる<sup>36)</sup>」といった意見が見られる。次男と三男に当たる雑誌名は明記されていないが、刊行時期を考えると『藍皮書』や『大偵探』だと考えられる。つまり、『紅皮書』の読者は他の探偵小説雑誌も読んでおり、雑誌の読者が重なっていたことが推測される。

探偵小説ブームの到来を喜ぶのは、20年代も40年代も共通して見られる姿勢だが、40年代では、読者によっては探偵小説を低級創作ではない、教育性のある娯楽小説として自覚し、歓迎していたようだ。40年代において、探偵小説は、当時の文化的窮乏を背景に、文化的な読み物を渴望する若者を癒す娯楽小説となっていったことが読み取れるだろう。

読者の分布について少し考えておきたい。『紅皮書』第2期の発行部数は6千5百部程である<sup>37)</sup>。それがどのように流通・販売されていたのかを示すデータは、見つかっていないが、読者の分布の手がかりとして、「紅皮書読者倶楽部」の第2期から第4期までに817名の会員の名前と本籍或は在住都市が記載されている。そのうち文字が判別できるもの812名分を整理、地域と

33) 原文：至於取材甚覺完滿，希望以後極力避免那些武俠神怪等無意識的下級創作，最好多載富有文藝性作品。（「紅皮書読者倶楽部」『紅皮書』第2期、1949年月日未記載）

34) 原文：尤其在這動盪畸形的社會裏我們青年的刊物，精神食糧委實少得可憐。偵探能使我們有銳敏的頭腦（中略）真是我們課餘工作後之良伴益友。（「紅皮書読者倶楽部」『紅皮書』第2期、1949年月日未記載）

35) 原文：當我們向書鋪、書攤購買『大偵探』『藍皮書』的時候（「紅皮書読者倶楽部」『紅皮書』第2期、1949年月日未記載）

36) 原文：我很欣喜又看到了一種偵探雜誌，大阿哥（新偵探）不行夭折，我至今還在惋惜著，老二（×××）和老三（×××）雖然健在，但老二已使人感到失望了，祇老三還算看得入眼。（「紅皮書読者倶楽部」『紅皮書』第2期、1949年月日未詳）

37) 「紅皮書読者倶楽部」（『紅皮書』第3期、1949年月日未記載）に「據我們的調查，至少第二三期藍皮書印六五〇〇冊，而紅皮書第二冊也印六五〇〇冊」とある。

主な都市に分類すると、人数の多い順に浙江232名、江蘇212名、上海196名、広東47名、安徽22名、杭州20名、南京19名、福建9名、湖北8名、北平6名、蘇州6名、湖南5名、江西5名、四川4名、山東4名、長沙4名、河南2名、天津2名、広州2名、大連1名、漢口1名、河北1名、陝西1名、廈門1名、新疆1名、成都1名となった。上海を中心に江南地域に圧倒的に読者数が多いのが分かる。この雑誌の出版地が上海であることが要因の一つだろうが、40年代の探偵小説ブームが上海を中心に起きたことを示している。また、この倶楽部の参加者が、江南地域以外にも存在していることから、探偵小説を愛好する読者が、広範囲に存在していたことを推測させる。

このような読者の存在は何を意味しているのだろうか。40年代になり、探偵小説に再注目した『万象』は、自誌が読者の「精神の糧」となることを期待した。その期待は、もちろん探偵小説にもかかっていた。そして当時の読者にとっても、探偵小説は、非常に重要な娯楽の一つとして受け取られていた。そうした状況が1940年代の探偵小説ブームを支えていたのである。

## おわりに

20年代に探偵小説が創作されるようになってから、30年代の不作の時代を経て、探偵小説が40年代から如何なる展開を経たか、さらに読者が如何に受け止めていたのかを検討した。

探偵小説は、清末に欧米の探偵小説を翻訳を介し受容、発展した。この時期の受容については先行研究が指摘するように<sup>38)</sup>、欧米の科学や人権といったような当時の中国にはまだ存在していなかった思想を輸入したものとして位置づけられている。

40年代には、当初「孤島」末期の上海を舞台に探偵小説が再注目され、終戦後には、上海を中心に探偵小説専門雑誌が創刊された。そこには、クイーンやクリステイ等のいわゆる黄金期の探偵小説や、パルプマガジンと関係があると思われる多くの犯罪事件のルポルタージュが掲載された。これらの刺激を受けてか、新たな作家による創作も生まれた。これらの雑誌は、読者に「精神の糧」を提供しようという考えであった。

そしてこれらを受容している読者に目を向けてみると、読者は、探偵小説雑誌の読者参加を求める企画を歓迎し、こぞって投稿を行った。また、新たに探偵小説の啓蒙性に着目し、精神

38) 例えば、范伯群は『中国現代通俗文学史(挿図本)』で次のように述べる。「『五四』運動の二十年前に、探偵小説の流入は、中国の読者に楽しみをもたらしただけでなく、閉塞した中国に「科学」と「人権」の一筋の風を吹かせたのだとは誰も想像できなかった。(原文：谁都想像不到，早在「五四」运动之前二十年，侦探小说的输入，不仅给中国读者带来了愉悦，而且为闭塞的中国吹来了一缕「科学」与「人权」的清风。)」(北京大学出版社 2007年) 420頁



的な糧として積極的に探偵小説を愛読している読者すら出現した。

探偵小説が如何に啓蒙性を備えているか、という考え方に同意するかは別問題として、発信者側と読者側の両方に、探偵小説の啓蒙性が強く意識されていたことが分かるだろう。無論、すべての読者がその啓蒙性に目覚めていたわけではないだろう。だが、少なくとも30年代には一度不作に陥った探偵小説は、40年代に「孤島」期そして以後の上海を中心に、戦争、そして終戦後の惨憺たる時期に、文化的窮乏に陥った人々の文化的な飢えを満たすもののひとつとなっていたことが言えるのではないだろうか。

